

臨床病期1a期非小細胞肺癌治療方針における FDG-PETの役割(5 画像診断・PET, 第46回 日本肺癌 学会総会)

著者	佐藤 幸夫, 大谷 真一, 手塚 憲志, 長谷川 剛, 遠藤 俊輔, 蘇原 泰則
雑誌名	肺癌
巻	45
号	5
ページ	538
発行年	2005-11-05
権利	日本肺癌学会
URL	http://hdl.handle.net/2241/00134125

P-36 臨床病期 1a 期非小細胞肺癌治療方針における FDG-PET の役割

佐藤 幸夫・大谷 真一・手塚 憲志・長谷川 剛
遠藤 俊輔・蘇原 泰則

自治医科大学 外科学講座 呼吸器外科部門

【背景】近年、CT 検査の普及と共に、野口の A/B 及び C の一部のような浸潤性のない、積極的縮小手術の適応と考えられる小型腺癌の頻度が増加している。しかし、術前 CT 及び術中迅速病理診断のみでは浸潤性の有無の判断は完全でない。我々は FDG-PET を組み合わせ浸潤性のない小型肺癌の選択を試みた。【方法】術前 PET を施行した臨床病期 1a 期非小細胞肺癌 42 例を対象とした。FDG 投与後 60 分後に早期像、120 分後に後期像を撮影し、各々腫瘍部 SUV の最大値及び平均値を測定した。【結果】AAH, 野口 A/B (n=6) : 1 例を除き SUV は後期で低下し、後期最大値はすべて 1 以下であった 0.78 ± 0.19 (0.24~0.97)。C (n=15) では SUV は後期で 10 例で上昇、5 例で低下した。後期最大値は 1.72 ± 0.95 (0.46~3.16) であった。線維化巣の 5mm 以下の例で低い傾向があった <5mm ; 1.08 ± 0.94 (0.46~3.16), >5mm ; 2.27 ± 0.54 (1.52~3.13)。D/E/F (n=16) では 2 例を除き SUV が後期で上昇し、後期最大値はすべて 2.1 以上であった 5.46 ± 3.43 (2.12~14.73)。扁平上皮癌では (n=5), 1 例を除き SUV が後期で上昇し、後期最大値はすべて 2.2 以上であった 7.27 ± 3.85 (2.21~11.94)。【結論】野口 A/B は後期で SUV が低下し、C 以上及び扁平上皮癌では上昇することが多く、後期値が良い判別の指標になると考えられた。後期最大値が 1 以下の症例では CT 所見及び術中迅速病理診断と組み合わせることにより、積極的縮小手術の適応を選択可能と考えられた。